



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	保健医療総論 1 における学習効果に関する検討 : 学生に向けた 3 か年のアンケート調査から
Author(s)	吉野, 淳一; 根木, 亨; 中村, 充雄; 木島, 輝美; 後藤, 葉子; 大塚, 知子; 植木, 瞳; 古名, 丈人; 池田, 望; 齋藤, 重幸; 古畑, 智久; 松村, 博文; 佐藤, 公美子; 谷口, 圭吾; 山本, 武志; 長多, 好恵; 牧野, 夏子; 横山, まどか
Citation	札幌保健科学雑誌, 第 6 号: 47-52
Issue Date	2017 年
DOI	10.15114/sjhs.6.47
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6990
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X647.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

報告

保健医療総論 1 における学習効果に関する検討 ～学生に向けた3か年のアンケート調査から～

吉野淳一¹⁾、根木 亨²⁾、中村充雄³⁾、木島輝美¹⁾、後藤葉子³⁾、大塚知子¹⁾、植木 瞳¹⁾、
古名丈人²⁾、池田 望³⁾、齋藤重幸¹⁾、古畑智久¹⁾、松村博文²⁾、佐藤公美子¹⁾、谷口圭吾²⁾、
山本武志¹⁾、長多好恵⁴⁾、牧野夏子¹⁾、横山まどか¹⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 札幌医科大学保健医療学部理学療法学科

³⁾ 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

⁴⁾ 札幌医科大学医学部公衆衛生学講座

本報告の目的は、保健医療総論1を受講する学生を対象にしたアンケートを基に授業の学習効果を検討することである。アンケートは2014年から毎年、保健医療総論の授業の前と後に実施している。アンケートは無記名、自記式で、五肢択一で答えるものと自由記述で構成されている。3年に渡るアンケート実施で、回答の内容に大きな変化は見られないものの、回収率が改善し、学生は控えめだが、意欲を持って授業に臨んでいる傾向が伺えた。授業の後には、コミュニケーションへの理解が増し、授業前に比べて学習課題に到達できていると回答する割合が増していた。自由記述からも学習への意欲や授業を通してコミュニケーションの基本を理解している様子が伺えた。

キーワード：保健医療、学習効果、アンケート

Students' achievement of the learning targets of a health sciences course in three consecutive years

Junichi YOSHINO¹⁾, Tohru NEKI²⁾, Mitsuo NAKAMURA³⁾, Terumi KIJIMA¹⁾, Youko GOTO³⁾, Tomoko OTSUKA¹⁾,
Hitomi UEKI¹⁾, Taketo FURUNA²⁾, Nozomu IKEDA³⁾, Shigeyuki SAITOH¹⁾, Tomohisa FURUHATA¹⁾,
Hirofumi MATSUMURA²⁾, Kumiko SATO¹⁾, Keigo TANIGUCHI²⁾, Takeshi YAMAMOTO¹⁾, Yoshie NAGATA⁴⁾,
Natsuko MAKINO¹⁾, Madoka YOKOYAMA¹⁾

¹⁾ Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

³⁾ Department of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

⁴⁾ Department of Public Health, School of Medicine, Sapporo Medical University

This questionnaire study aimed to determine students' achievement of the learning targets of a health sciences course. Every year since 2014, students have completed an anonymous questionnaire before and after the completion of a health sciences course. The questionnaire consists of both multiple-choice and free-response items. While no significant changes in responses to the questionnaire items were observed over the 3-year period, the response rate improved and we found that students' performance in the course was affected by their level of interest in the course content. The increase in the percentage of students who responded that their understanding and ability to communicate were improved by the course demonstrates that the learning targets of the course were being achieved. From the content of the students' free responses, we found that the will to learn of individual students affected their understanding of the basic principles presented in the health sciences course.

Key words : health sciences, learning targets, questionnaire

Sapporo J. Health Sci. 6:47-52(2017)

DOI:10.15114/sjhs.6.47

I. はじめに

札幌医科大学保健医療学部では、建学の精神¹⁾のもと、看護師・理学療法士・作業療法士を目指して入学した学生に医療人としての素養を身につけるための教育機会を提供し、北海道の地域に貢献できる人材を養成している。その中でも保健医療総論は、このような目的に沿って学部一丸となり1年次から4年次までを貫く特色ある科目である。

現代は多様でパーソナルな伝達媒体の普及により情報が氾濫している。当然に、そこで成長する若者の対面コミュニケーションの減少と対人関係スキルの低下が危ぶまれる²⁾³⁾。そのような状況にあって、1年次を対象とする保健医療総論1では、社会の一員としての基本的なコミュニケーション技術の習得⁴⁾を目指し、1. 基本的対人コミュニケーションを実践できる、2. 医療人として必要な倫理的態度の基本を理解しその概要を述べることができる、3. 時と場所などをわきまえて適切なコミュニケーション技法を用い必要な情報を得ることができる、4. 個々に経験した課題を基に医療人を目指す人としての基本的なコミュニケーションの重要性を議論し自己の課題を述べるができる、といった学習目標を掲げている。そのため、コミュニケーションに関する基調講演を受けた後、グループを形成し、コミュニケーションスキルのロールプレイング、電話でのインタビュー予約、学長をはじめとする大学内職員へのインタビューを実施し、そこで得られた情報をグループ毎に報告し意見交換している。この科目は、毎年4月の入学式直後に保健医療学部で一斉開講される学生にとってはじめての短期集中型の必修授業である。ここでは、学生自身がグループメンバーとコミュニケーションを図り、協働して作業課題に取り組むことが求められる。入学したての学生たちにとって、戸惑いや不安を抱えながらの受講体験であることは想像に難くない。

このような本学保健医療学部に入学生ばかりの看護・理学療法・作業療法、3学科の1年次の学生全員に受講してもらう保健医療総論1では、2014年度から学習効果を推し量るため、授業の開始前・オリエンテーション時と終了時にアンケートを実施している。導入した年のアンケート結果についてはすでに報告したが⁵⁾、3年を経過してそのアンケート結果がどのように推移しているか経年変化をこの段階で報告しておきたい。

II. 目 的

保健医療総論1で授業開始前・オリエンテーション時と授業終了時に実施した2014年度から2016年度までの3か年のアンケート結果に基づき学習効果を検討する。

III. 対象と方法

1. 対 象

2014年度から2016年度に保健医療総論1を受講した札幌医科大学保健医療学部の看護学科(一学年50名)・理学療法学科(一学年20名)・作業療法学科(一学年20名)の学生、延べ270人を対象とした。2014から2016年までの3か年の入学生のうち、社会人経験のある学生は、いなかった。

2. 方 法

毎年入学式の前後に行われる新入生オリエンテーションの際に、保健医療総論1から無記名自記式のアンケートが依頼される旨、説明した。その後、保健医療総論1の授業開始前のオリエンテーションの際に、アンケートの趣旨と同意の確認ならびに記入と回収の方法を説明し、協力を依頼した。また、授業の最後に行われる報告会の後に終了時のアンケートを配布し、趣旨、同意確認、記載、回収方法を説明して記入を依頼した。開始前・オリエンテーション時のアンケートの回収は、教員が投函用の箱を用意してそこへ投げ入れしてもらい、終了時の回収は、所定の場所に据え置いた回収ボックスへの投函を依頼した。

3. アンケートの構成

アンケートは、保健医療総論1の学習目標に沿ったかたちで質問項目が構成され、それぞれの質問に、まったくそうではない、そうではない、どちらともいえない、まあまあそうである、まったくそうである、の5つの選択肢から一つを選択する方法とした。質問紙の最後に自由記述欄を設け、開始前・オリエンテーション時では「授業に臨むに際して思うこと」、終了時には「授業の終わりに際して思うこと」を記載するよう求めた。2014年度にアンケートをはじめた時、開始前・オリエンテーション時も終了時も質問は15項目だったが、質問紙の説明が明快かどうか問うべきであると指摘を受け、2015年より開始前・オリエンテーション時アンケートの冒頭にその質問を加え16項目となっている。

アンケートの集計に際しては、まったくそうではない～まったくそうである、に1から5までの数値を昇順に割り当てExcel 2011とSPSS version18を用いて記述統計を求め、全体の傾向を把握したうえで3か年の回答の割合を比較した。自由記述に関しては、その記載内容の文脈を包括的に表す端的な文をカテゴリとして表記した。カテゴリ検討の際、2014年度に報告したカテゴリを参照したが⁵⁾、2015及び2016年度の内容もこれにはほぼ包含された。最終的にカテゴリ名には若干の修正を加えた。

4. 倫理的配慮

本報告を行うにあたり2014年に札幌医科大学倫理審査委

員会を受審し承認を得た。

IV. 結 果

アンケートは、毎年90名の学生に配布された。回収については2014年度は開始前アンケートが30部（回収率33.3%）、終了時アンケートは74部（回収率82.2%）でうち有効回答は73部であった。2015年度は、開始前アンケートは88部（回収率97.8%）、終了時アンケートも88部回収されたが、白紙2部と肯定と否定を取り違えて回答したと思われる3部を除いて83部を有効回答とした。2016年度は、開始前アンケートは90部すべてが回収され、終了時アンケートは80部回収されたが（回収率88.9%）、うち1部は肯定と否定を取り違えて回答したと思われる不備があり有効回答数は79部となった。

1. 3か年のアンケートの一覧

2014年度から2016年度のアンケートの結果は、一覧に示した（表1）。

1) 開始前・オリエンテーション時の回答について

2015年度から開始前・オリエンテーション時の冒頭に新たに設けられた質問項目⑩オリエンテーション時のこのアンケートの説明はわかりやすいものであった、については9割程度がまあまあそうである、まったくそうである、に回答していることが確認できた。

⑩を除くほとんどの質問項目のまったくそうである、の回答割合が2016年度は前2年よりも下回ったが、まあまあそうである、の回答割合ではそれが逆転する傾向を示した。2014年度に回答のなかった項目のうち2015及び2016年度に回答があった質問項目が6つ（①②⑥⑪⑫⑮）あった。これらはいずれも、まったくそうではない、そうではない、といった自分のコミュニケーション能力やマナーについて否定的な回答を選択していた。

2) 終了時の回答について

質問項目⑥⑦のそうではない、の回答欄には、2014年度には回答がなかったが、2015及び2016年度には回答があった。反対に、⑩⑬⑮の3項目の、そうではない、という回答欄には、2014及び2015年度には回答があったのに、2016年度には回答はなかった。

分布の割合に大きな変化は認められないが、⑬得られた情報の扱いについて情報提供者に伝えることの必要性が理解できる、という質問項目のまったくそうである、の回答欄において2016年度の割合は比較的増えている。

3) 開始前・オリエンテーション時と終了時の比較

一見して全般に、終了時の回答は開始前よりも肯定的な方向によっている。表2の各年度の中央値を見ると、回答が肯定的な方向に移動した質問項目数は2014年度で10、2015年度で11、2016年度では12あった。いずれの年度においてもそれ以外の質問項目の中央値は開始前と終了時で変

わらず、減少するものもなかった。実際に、開始前・オリエンテーション時にまったくそうではない、に回答があった質問項目は9つあったが、終了時には1つに減っている。また、質問項目①②では開始前・オリエンテーション時に、そうではない、との否定的な回答があったが、終了時にはその欄への回答はなくなっていた。

終了時の質問項目⑥⑦のそうではない、の回答欄には、2014年度には回答がなかったが2015及び2016年度には回答があったことは先に述べたが、開始前・オリエンテーション時と比較すると⑥⑦ともその割合は減っている。ただ、⑦の2016年のそうではない、については終了時に新たに3名が回答した。

2. 自由記述の内容

アンケートの自由記載欄へは、2014年度は8件（開始前）と14件（終了時）、2015年度は31件（開始前）と30件（終了時）、2016年度は23件（開始前）と30件（終了時）の書き込みがあった。カテゴリ名は、開始前は【授業への前向きで意欲的な姿勢】【授業に対する不安と緊張】とし、終了時は【コミュニケーション理解の深化】【入学時にグループを用いて授業することの仲間づくりの効果】【授業の目的に対する評価】とした（表3）。学生は【授業に対する不安と緊張】を感じながらも【授業への前向きで意欲的な姿勢】で授業に臨み、【入学時にグループを用いて授業することの仲間づくりの効果】によって【コミュニケーション理解の深化】を果たし、【授業の目的に対する評価】を述べることできていた。

電話の対応は一年生にはハードルが高いのではないかという意見もあったが、目上の人に電話をするのは貴重な機会だという前向きな意見もみられた。

V. 考 察

1. アンケートにみる経年の変化

1) 回収率の改善

今回は、2014年度から2016年度までの3か年の変化に着目したが、最初に気づかされるのは回収率の向上である。2014年度はアンケートをはじめた年であり、回収の手順に不慣れであったり、協力は任意であるとの説明で学生が慎重になったりしたのかもしれない。

2) 学生の姿勢

2014年度にはなかったものの、2015及び2016年度には自らのコミュニケーション能力やマナーに否定的な回答が複数あった結果から、2014年度生に比して、2015及び2016年度生は自分自身のコミュニケーション能力やマナーに関して評価が厳しい傾向が見える。しかし、自由記載欄への書き込みも見てみると、学生はコミュニケーション能力の向上やマナーの習得に関心や意欲を示し前向きであると同時に、自信のなさや不安・苦手を抱えていることがわか

表 1 2014年から2016年までの開始前・オリエンテーション時と終了時のアンケート結果一覧

質問項目	まったくそうではない		そうではない		どちらともいえない		まあまあそうである		まったくそうである		無回答		計
	開始前	終了時	開始前	終了時	開始前	終了時	開始前	終了時	開始前	終了時	開始前	終了時	
オリエンテーション時のこのアンケートの説明はわかりやすいものであった	2014 -	-	2015 11 (12.5)	-	2016 3 (3.3)	-	2014 28 (31.8)	-	2015 49 (55.7)	-	2016 2 (2.2)	-	88 (100)
① 良いコミュニケーションに必要なことは何かわかる	2014 0	0	2015 13 (43.3)	3 (4.1)	2016 46 (51.1)	33 (45.2)	2014 15 (30.0)	2 (6.7)	2015 28 (33.7)	37 (50.7)	2016 0	0	30 (100)
② メッセージの交換に際しては受手手の意味づけが重要であることとを理解している	2014 0	0	2015 3 (3.4)	1 (1.2)	2016 52 (59.1)	10 (12.0)	2014 52 (59.1)	22 (25.0)	2015 72 (86.7)	0	2016 0	0	88 (100)
③ 対人コミュニケーションでは養情が大きな影響をもたらすことを理解している	2014 0	0	2015 3 (3.4)	2 (2.4)	2016 39 (43.3)	8 (9.6)	2014 28 (31.8)	57 (64.8)	2015 73 (88.0)	0	2016 0	0	88 (100)
④ 対人コミュニケーションにおける非言語メッセージの役割について理解している	2014 0	0	2015 12 (13.6)	1 (1.2)	2016 53 (58.9)	15 (19.0)	2014 13 (43.3)	19 (26.0)	2015 66 (79.5)	1 (1.1)	2016 0	0	88 (100)
⑤ コミュニケーションに関するこれまでの自分の経験を言語化して他者と共有できる	2014 0	0	2015 10 (11.4)	2 (2.4)	2016 42 (46.7)	16 (20.3)	2014 30 (34.1)	45 (54.2)	2015 22 (26.5)	0	2016 0	0	88 (100)
⑥ 他の学生と挨拶を重ねて目的達成のための企画・立案・実施ができる	2014 0	0	2015 9 (10.2)	2 (2.4)	2016 37 (41.1)	4 (5.1)	2014 9 (12.3)	39 (53.4)	2015 25 (34.2)	0	2016 0	0	88 (100)
⑦ 面識のない目上の人に電話で依頼をする際の事前の準備ができる	2014 0	0	2015 10 (11.4)	1 (1.2)	2016 38 (42.2)	6 (7.6)	2014 11 (36.7)	34 (46.6)	2015 31 (37.3)	0	2016 0	0	88 (100)
⑧ 面識のない目上の人と話す際、ことばづかいに配慮して挨拶し会話できる	2014 0	0	2015 3 (3.4)	1 (1.2)	2016 16 (17.8)	4 (5.1)	2014 20 (22.7)	49 (55.7)	2015 15 (17.0)	38 (45.8)	2016 0	0	88 (100)
⑨ 面接の目的をわかりやすく伝え、記録の許可を得る必要性が理解できる	2014 0	0	2015 5 (5.7)	2 (2.4)	2016 24 (26.7)	4 (5.1)	2014 8 (11.0)	21 (28.8)	2015 28 (33.7)	22 (25.0)	2016 0	0	88 (100)
⑩ 面接を通じて必要な情報収集を行うことができる	2014 0	0	2015 10 (11.1)	0	2016 39 (43.3)	6 (7.6)	2014 14 (46.7)	37 (41.1)	2015 33 (38.0)	5 (5.6)	2016 0	0	90 (100)
⑪ 面接時の相手の反応を見て、進捗の調整を考慮することができる	2014 0	0	2015 8 (9.1)	1 (1.2)	2016 40 (44.4)	15 (19.0)	2014 18 (60.0)	11 (15.1)	2015 32 (36.4)	64 (77.1)	2016 0	0	88 (100)
⑫ 面接終了時に適切におれを述べることができる	2014 0	0	2015 3 (3.4)	1 (1.2)	2016 10 (11.1)	1 (1.3)	2014 8 (9.1)	44 (50.0)	2015 17 (20.5)	30 (33.3)	2016 0	0	90 (100)
⑬ 得られた情報の扱いについて情報提供者に伝えることの必要性が理解できる	2014 0	0	2015 4 (4.5)	1 (1.4)	2016 21 (23.3)	3 (3.8)	2014 15 (50.0)	28 (33.7)	2015 39 (53.4)	0	2016 0	0	88 (100)
⑭ 実施した内容を他者にわかりやすく説明し共有することができる	2014 0	0	2015 7 (7.8)	2 (2.5)	2016 47 (52.2)	6 (7.6)	2014 8 (26.7)	37 (50.7)	2015 22 (30.1)	0	2016 0	0	90 (100)
⑮ 自分の役割を認識して他の学生を助けたり協調したりできる	2014 0	0	2015 2 (2.3)	1 (1.4)	2016 20 (22.2)	5 (6.3)	2014 9 (30.0)	32 (43.8)	2015 33 (45.2)	0	2016 0	0	73 (100)

表2 アンケートの質問項目の中央値と範囲

質問項目(簡略表記)	2014年		2015年		2016年	
	開始前	終了時	開始前	終了時	開始前	終了時
①説明のわかりやすさ	-	-	5(3-5)	-	5(3-5)	-
①良いコミュニケーションに必要なこと	4(3-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(4-5)
②受け手の意味づけの重要であること	4(3-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(4-5)
③表情が影響をもたらすことの理解	5(3-5)	5(3-5)	5(3-5)	5(3-5)	5(3-5)	5(4-5)
④非言語メッセージの役割の理解	4(2-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(4-5)
⑤コミュニケーションの経験の言語化	3(2-5)	4(2-5)	3(1-5)	4(2-5)	3(2-5)	4(2-5)
⑥他学生との企画・立案・実施	4(3-4)	4(3-5)	3(1-5)	4(2-5)	3.5(1-5)	4(2-5)
⑦電話で依頼する際の事前準備	3(2-5)	4(3-5)	3(1-5)	4(2-5)	3(2-5)	4(2-5)
⑧言葉づかいに配慮した会話	4(2-5)	4(3-5)	4(1-5)	4(2-5)	4(2-5)	4(3-5)
⑨記録の許可を得る必要性の理解	4(2-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(2-5)	4(2-5)	5(3-5)
⑩面接を通じての必要な情報収集	3(2-5)	4(2-5)	4(2-5)	4(2-5)	3(1-5)	4(1-5)
⑪相手の反応による面接の進行の調整	3(3-5)	4(2-5)	4(2-5)	4(2-5)	3(1-5)	4(2-5)
⑫面接終了時に適切なお礼を述べること	5(3-5)	5(3-5)	4(2-5)	5(2-5)	4(2-5)	5(3-5)
⑬情報の扱い方を伝える必要性の理解	4(2-5)	5(2-5)	4(1-5)	5(2-5)	4(2-5)	5(3-5)
⑭実施内容のわかりやすい説明と共有	3(2-5)	4(2-5)	3(2-5)	4(2-5)	3(1-5)	4(2-5)
⑮役割を認識した上での助力や協調	4(3-5)	4(2-5)	4(2-5)	5(2-5)	4(1-5)	4(3-5)

表3 自由記述の抜粋・要約とそのカテゴリ

開始前・オリエンテーション時	
カテゴリ	自由記述の要約(年)
【授業への前向きで意欲的な姿勢】	<ul style="list-style-type: none"> ・目上の人とのコミュニケーション学びたい(2014) ・バイトで培った敬語の知識を活用したい(2014) ・5人で協力して頑張りたい(2015) ・コミュニケーション能力を向上させたい(2015) ・最後までやり遂げたい(2016) ・コミュニケーションのコツを身に着けたい(2016)
【授業に対する不安と緊張】	<ul style="list-style-type: none"> ・相手にわかってもらえるか、役割果たせるか不安(2014) ・インタビュー緊張しレポートも不安(2014) ・マナーに自信がない(2015) ・目上の人と会話したり電話したりは苦手(2015) ・グループのメンバーと協調できるか不安(2016) ・テキストは難しく何をするのか理解できなかった(2016)
終了時	
カテゴリ	自由記述の要約(年)
【コミュニケーション理解の深化】	<ul style="list-style-type: none"> ・医療人にコミュニケーション能力は重要なことと再認識(2014) ・コミュニケーションが理解できる授業だった(2014) ・非言語コミュニケーションを理解できた(2015) ・コミュニケーションのさまざまな側面をみられた(2015) ・コミュニケーションについて改めて考える機会になった(2016) ・コミュニケーションをとるときに積極的に活かしたい(2016)
【入学時にグループを用いて授業することの仲間づくりの効果】	<ul style="list-style-type: none"> ・今の自分たちに必要なのでこの時期でよかった(2014) ・不安だったが楽しく友達できた(2014) ・他学科の友人ができる良い機会だった(2015) ・チームの人と協力してできてよかった(2015) ・初対面の人ばかりで不安だったが仲良く協力できてよかった(2016) ・いろいろな人と交流できて楽しかった(2016)
【授業の目的に対する評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューで大切なことを多く聞いた(2014) ・医療人を目指す自分たちに必要なことを学べた(2014) ・電話の対応は一年生にはオーバーワーク(2015) ・コミュニケーションをするうえで聞く能力も大切とわかった(2015) ・コミュニケーションについての基本を学べてよかった(2016) ・コミュニケーションの大切さ、実践の難しさを学ぶことができた(2016)

る。2016年度の開始前・オリエンテーション時アンケートのまったくそうである、の回答割合が少ないことにもこの不安・苦手感は影響しているかもしれない。

3) 学習の効果

自信がなく不安や苦手感を抱きながらも、能力向上への関心・意欲を持ちあわせている学生たちだが、終了時には開始前・オリエンテーション時よりも全般に肯定的な方向への回答がなされていて学習の効果が得られていると思われる。この終了時に向けて肯定的な方向に向かう傾向は3か年を通じて維持されている。さらに、⑩⑬⑮の3項目ではそうではない、という回答欄に前年まで回答があったのに、2016年度には回答がなかったことから一部にはより鮮明になる傾向さえ見られる。これには、保健医療総論1を担当する各教員の指導の習熟度も関連している可能性がある。また、インタビューの前に学生たちは、対人コミュニケーションを円滑に進められるようロールプレイを行うが、その導入方法は学生の戸惑いをわずかでも少なくするため教員間で協議し修正してきた。このような関心・意欲はあっても自信がなく不安・苦手感のある学生が取り組みやすい課題の導入方法の工夫が、終了時の肯定的な方向の回答を得るのに寄与していると思われる。看護学生を対象とした研究で、橋本らは「対人関係を苦手とする学生にとっては、(中略)教員の学生への心理的サポートも欠かせない」⁶⁾と指摘する。保健医療総論1の教員にはこの心理的サポートを授業全般に渡り提供する意識が、打ち合わせ等を通じ醸成されていると考える。

しかしながら学生は、体験的な学習を経て、改めて難しさも認識している。⑥他の学生と検討を重ねて目的達成のための企画・立案・実施ができる、ではその割合は減ったが終了時にもそうではない、との回答は残り、⑦面識のない目上の人に電話で依頼をする際の事前の準備ができる、では終了時に新たに3名の学生がそうではない、と回答した。授業での実体験から難しさを感じたことが、このような結果に結びついた可能性がある。

自由記載欄への書き込みの内容を見る限り、学科を超えた授業であること、学習方法としてグループを活用していること、明確な作業課題を設定していることなどから、友人や仲間づくりといった大学生活を充実させるために有意義な資源を学生が享受し獲得していることがわかる。これはいわば授業の副産物的な位置づけではあるが、若者のコミュニケーションスタイルが変化し対人関係の希薄化が心配される昨今、学習の効果を検討する際の明るい材料であると考えられる。

VI. おわりに

保健医療総論1の授業は、時に学生に対人関係の難しさを伝える。それだけに教員は、せつかくの関心や意欲が失われないよう学生の不安・苦手感を推察し支持的に関わっ

ていきたい。今後の課題としてわかりやすいテキストの作成を検討していく必要もあるだろう。

VI. 謝 辞

アンケートに協力してくれた学生の皆さん、保健医療総論1の運営に協力いただいたインタビューの皆さま、労をいとわずサポートしてくれた学務課の方々に感謝します。

文 献

- 1) 札幌医科大学：建学の精神。
<http://web.sapmed.ac.jp/jp/summary/03bqho00000001cy.html>, (2016-12-26)
- 2) 尾崎かほる, 久東光代：女子学生の友人とのコミュニケーションスタイルと交友関係意識. 日本女子大学紀要17：73-85, 2006
- 3) 柴田早苗, 松本賢哉：医療系学生の携帯電話メールへの依存状態と対面によるコミュニケーション能力との関連. 日本看護学教育学会誌21(2)：25-33, 2011
- 4) 上田ゆみ子, 渡邊順子：看護学士課程におけるコミュニケーション技術に関する研究. 日本看護学教育学会誌22(2)：1-11, 2012
- 5) 吉野淳一, 後藤葉子, 佐藤公美子他：保健医療総論1における学生へのアンケートを用いた学習効果に関する検討. 札幌保健科学雑誌4：73-78, 2015
- 6) 橋本茂子, 上田雪子, 木部泉：青年期初期から看護を志向する看護学生の対人関係の形成と自我状態の透過性調整力との関連. 千葉看護学誌22(1)：43-51, 2016